四川・大足石篆山石窟第６号龕孔子及び十哲像について

北　　進　一

A Study of the Konzi and Ten Disciples
of the Shizhuanshan Niche 6 at Dazu in Sichuan Province

Shinichi KITA

はじめに

国の史跡に指定されている栃木県足利市の足利学校大成殿（孔子廟）中央に、孔子坐像が祀られている。ヒノキ材の寄木造で、像高78.0センチ、胎内に室町時代・天文４年（1535）造立の年記などが墨書されている。制作年代が明確な木造の孔子像では、現存する国内最古の作例である。この像は頭巾をかぶり、顎鬚をたくわえ、額や両眼・口唇部の周囲に皺を刻む老相を示す。襟に金泥を塗る儒服を着て、右手は膝上で五指を軽く曲げて持物（亡失、おそらく羽扇か）をとり、左手は五指をのばし掌を下に向けて膝上におき、右脚を前に趺坐する。このような姿は、在野で孔子（前551～前479）が弟子たちの教育にあたる、いわゆる孔子行教像といわれるものである。胎内銘によると、六十六部幸憲が勧進し、亡き肉親（主に母親）の供養のために何人もの人物が結縁・合力して制作された[1]。大沢慶子氏は、願主を胎内銘に登場する執権長尾憲長と推論し、六十六部清源が脇工として造像を担当したと指摘している[2]。六十六部とは、日本全国六十六州の霊場を廻国し、書写した法華経を一部ずつ奉献する行脚僧をいう。孔子坐像が造立された当時の足利学校庠主（校長）は６世座主日新文伯であり、彼は江州（近江）出身の僧侶で、勧進聖の六十六部幸憲も同郷である。また大沢氏は、本像を「関東で活躍した鎌倉大仏所を称する弘円（1442～1529）の一連の作例にも通じるところがある」[3] と解釈している。したがって足利学校の孔子坐像は、僧侶と仏師が造像に深く関与した儒仏習合の賜物であるとみなせるのである。その像容も中国大陸の孔子彫塑像ではめずらしい趺坐像であり（中国の場合はほとんどが立像か倚坐像である）、仏像あるいは高僧像に近似している特徴を表す点が注目される。

中国における孔子像は、おそくとも前漢時代（前202～後８）に画像として成立している[4]。孔子像を礼拝の本尊として祀ることは、すでに前漢初期に闕里（山東省曲阜。孔子の故宅の地）の孔子廟で釈奠（孔子祭典）が行われていたことが推察され、漢代以前に遡ると考えられる[5]。前漢・景帝の時代（前157～前141）、蜀（四川省成都を中心とする地域）の郡守・文翁が成都に建てた学堂には孔子や古代の聖帝、賢人など七十余人の壁画が描かれ、「益州文翁学堂図」と呼ばれていた[6]。後漢時代（25～220）になると画像石に「孔子・老子会見図」が頻出するが、孔子の彫塑像については北魏時代（386～534）の闕里孔子廟に孔子立像（おそらく塑造）と二弟子像が安置され（『水経注』巻25）、東魏の興和年間（539～542）に闕里孔子廟に祀られている孔子像の改修と十哲（孔子の直弟子10人）彫塑の並置の記録が見られる[7]。唐代になると釈奠は整備されてゆき、玄宗の開元８年（720）には長安の先聖（孔子）廟で釈奠を行う際、先聖孔子坐像（おそらく塑造の倚坐像）を中心として、傍らに先師顔回ら十哲像（坐像から塑造の立像に改められた）、曾参の塑像、壁に描かれた七十子及び二十二賢の画像が祀られていた[8]。開元27年（739）孔子は「文宣王」と王号

で追諡されると、長安・洛陽・闕里の孔子像の服を衮冕（皇帝の礼服。但し後記によればこの時はまだ諸侯王のもの）としたが、他の像は旧のままであった。ここでの旧とは、幞頭をかぶった行教像か、魯の大司寇（司法大臣）であったことを表す冠をかぶった司寇像の、どちらかであろう[9]。その後、明代の世宗・嘉靖９年（1530）に全国の孔子像を木主（位牌）に替えたとされるが[10]、現在の曲阜孔廟大成殿には衮冕姿で倚坐の孔子塑像（高さ3.5メートル。1983年再塑）が祀られている。

ところで、現在中国や日本各地の孔子廟に祀られている孔子像と異なり、四川地域の重慶市・大足石篆山第６号龕（図１。以下、本龕）の孔子像は特異な存在である。同石窟入口寄りに、元豊５年（1082）銘の第７号三身仏龕（図２）と翌年銘の第８号老君龕（図３）とともに並列して造営された龕で、龕内に孔子及び十哲像を彫り出し、北宋・元佑３年（1088）の造像銘を有する。これら３龕は三教合一（一致）の思想に基づく可能性が高く、地元の仏工（彫工）である文惟簡が造像したことがわかる。上述の足利学校の孔子像が仏師による制作と推定されるが、本龕の孔子及び十哲像も仏工による造像であり、きわめて興味深い。本龕の孔子及び十哲像を考察していきたい。

図１　大足石篆山第６号孔子及び十哲龕

図２　大足石篆山第７号三身仏龕

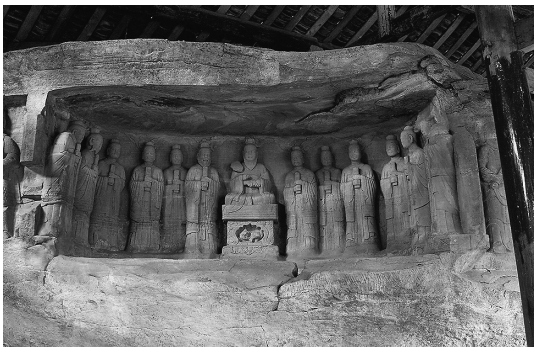

図３　大足石篆山第８号老君龕

第１章　大足石篆山石窟と第６号龕孔子及び十哲像の概要

⑴　大足石篆山石窟の概要

まずは大足石篆山石窟と本龕の概要を述べてみたい。

大足石篆山石窟は、重慶市大足県城の西南20キロの三駆郷にある。大足県内には現在75カ所にわたって摩崖造像や石窟が分布しており、それらを総称して「大足石刻」と呼び、1998年に「世界文化遺産」に登録された。この75カ所の「大足石刻」（以下、本稿では大足石窟群とする）のうち、石篆山石窟は、県城北１キロの北山石窟、県城南1.5キロの南山石窟、県城東北15キロの宝頂山石窟、県城東南20キロの石門山石窟とともに大足石窟群を代表する石窟といえる。大足石窟群はほとんどが唐代から南宋にかけての造像であり、特に北宋・南宋の優れた彫刻が残る点と、仏教・道教・儒教の３教が混淆した土着性の濃い浮彫りや彫像が現存する点に特徴がある。石篆山石窟はこの２点が顕著である。

石篆山石窟群は、造像の分布が石篆山石窟と千仏崖に分かれている。千仏崖は石篆山北面に位置し、主な10龕が編号されているが、すべて明代の造像なので本稿では考察しない。石篆山石窟は、主に９つの龕が編号されている。三駆郷の中心部より西へ向かって約５キロ、車道から山の斜面をわずかに降りたところに現在の入口があり、入口を入ってすぐに北宋・紹聖３年（1096）銘の第９号地蔵十王像龕（図４）が残る。第９号龕から尾根の傾斜に沿って降ると、上記した元豊６年（1083）銘の第８号老君龕と前年銘の第７号三身仏龕と続き、北宋・元佑３年（1088）銘の本第６号龕に至る。これら４龕は、筆者が２度目に石篆山石窟を訪れた2009年の段階では大きな庇に覆われ保護されていた。本龕の向かって左隣に庇を出る門があり、それを抜けて尾根道を進むと、右側崖壁に元佑５年（1090）銘の第５号騎獅文殊・騎象普賢龕、第４号龕[11]、第３号残龕、元豊８年（1085）銘の第２号宝誌和尚龕[12]と断続的に続き、岐路を逆に少し登った地点に第１号訶梨帝母龕がある。

図４　大足石篆山第９号地蔵十王像龕

各龕の造像年記や配置を見ると、石篆山石窟はまず元豊５年（1082）年に第７号三身仏龕、翌年に第８号老君龕を仏道双龕として造営し、２年後に谷へ数10メートル降りた第２号宝誌和尚龕を開鑿、さらに３年後に本龕を追加して第７号龕を中心に第８号龕と本龕で仏教・道教・儒教の三教合一構成にした可能性が考えられる。その後、元佑５年（1090）第５号騎獅文殊・騎象普賢龕、６年後に第９号地蔵十王像龕を該当地点に追龕していったと思われる。これら６龕の各所に残る題記には、第７号龕・第２号龕・本第６号龕・第５号龕・第９号龕に地元・岳陽の鐫工（彫工）である文惟簡及び息子の居用、居安、居礼などの造像記が現存する。第８号龕には鐫工名は判別しないもの、第７号龕と双龕と見なせるので同じく文惟簡と息子たちの造像であることは間違いない。第７号・８号双龕と本龕が現在庇で覆われた一連の崖壁に開鑿されているのに対し、かなり位置が離れた第２号宝誌和尚龕が年代的に第７号・８号双龕と本龕の間の造像なのが気になる点であるが、第２号龕の宝誌和尚像は仏教の高僧に不老不死の仙薬を求め逍遥する道教的イメージを付加させており[13]、これら文氏一族造像の４龕は仏教・道教、そして儒教へと漸次習合させる意図があったのかもしれない。いずれにても本龕の孔子及び十哲像は、第７号龕の三身仏像と第８号龕の老君像との

関連性がきわめて強いと考えられる。

⑵　石篆山石窟第６号龕孔子及び十哲像の概要

本龕（第６号龕）は平頂龕で、高さ1.94メートル、幅3.25メートル、深さ1.48メートル[14]。正壁中央に方台の上に倚坐する孔子像を彫り出す。像高140センチで、頭巾を被り、２条の巾帯の翻りが後壁に浮き彫りされ、面長で目尻が少し吊り上がり厳しめな壮年相の顔貌、顎鬚がなく（図５）、円襟で広袖の長袍を着て、胸部を広帯で締め、雲頭靴を履き、左手は左膝上に置き、右手は右膝上で羽扇を持つ、いわゆる孔子行教像である。方台正面の下段は二間に浮彫りし、各間に銀杏葉状の刳り（格狭間）を施す。

図５　石篆山第６号龕孔子面相部

孔子像の左側には、正壁に３軀、左側壁に２軀の弟子立像を彫り出す。頭部横の後壁に弟子の姓名が刻まれ、内から外へ顔回、閔損、冉有、言偃、端木賜とある。孔子像の右側にも正壁に３軀、右側壁に２軀の弟子立像を彫り出す。頭部横の後壁に弟子の姓名が刻まれ、内から外へ仲由、冉耕、宰我、冉求、卜商とある。これら十哲像は、いずれも像高140センチ前後で、頭に方形高冠を戴き、円襟で広袖の長袍を着て、雲頭靴を履く。両手あるいは片手で朝笏を握り、顎鬚の有無や顔貌に老若の差をつけ各十哲の個性を表出しているようである。本十哲像と、『論語』などの文献資料が記す十哲の性質や他の十哲像との比較は後述する。なお、本龕の十哲名の刻記は粗く、しかも後述するように「冉有」と「冉求」の混乱もあるため後世の追刻の可能性は否めない。

龕口両端門柱に一対の半身の武人像を彫り出す。右像は高さ131センチ、頭に冠を戴き、顔を内側斜め下に向け瞋目で睨み、円襟で広袖の長袍を着て、右手で長棒を握り、左手は胸に当てる。左像は現状で頭部が欠損し胸部も破損しているが、右像と同様の服装をしており、両手で短棒を捧げ持つ。

左側門柱上方に“元佑戊辰歳孟冬七日、設水陸合慶賛訖。弟子厳遜、発心鐫造此一龕、永為供養。願世世生生、聡明多智。岳陽処士文惟簡”の題記がある。この題記により、本龕は（仏）弟子の厳遜が発願し、岳陽鐫工の文惟簡が制作、元佑３年（1088）10月７日に完成され、水陸会が催されたことが判明する。

第２章　石篆山第６号龕孔子及び十哲像の図像解釈

⑴　孔子の略伝と孔子像の図像変遷

本龕の孔子像は、上述のように頭巾を被り長袍を着て倚坐するが、他のほとんどの孔子像と比べて、壮年相の顎鬚を蓄えない点が特異である。この点を探るため、儒教美術における孔子像の図像変遷を辿ってみたい。

最初に孔子の略伝を記す。孔子（前551～前479）は、春秋時代末の思想家で、儒教（儒学・儒家思想）の開祖。春秋・魯国の昌平郷（現在の山東省曲阜市）に誕生し、本名は孔丘。孔子の伝記を記す前漢・司馬遷（？～前86頃）著『史記』「孔子正家」では、生まれた時に頭の中央がくぼんでいたので丘と名づけられたという。家は貧しかったが、幼少から学問に優れ、20代後半で魯の下級役人になった。その後一時魯を離れ、帰参を繰り返し弟子を取るが、52歳の時に魯の定公によって

宰（長官）に抜擢され、さらに大司寇（司法大臣）に就任した。

しかし、魯の内乱にあって国を離れ（前497年）、各地を流浪・帰国を繰り返した。乱世のなか周王朝の「礼楽（身分秩序に従った行為規範）」の衰退を嘆き、「孝（道徳秩序への従順な論理）」と「仁（人間の普遍的な愛情）」をもって礼楽の立て直しを唱え、70数人の君主に仕官を求めたが、厚遇されず最後に魯に戻り、門人を集めて弟子の教育に専念した。『論語』は、孔子没後、彼の弟子たちが記録した孔子教団の言行録である。

孔子は魯の哀公16年（前479）73歳で病死し、魯城（曲阜）の北に葬られたが、儒教が隆盛すると、この墓を中心に植樹が行われ、周囲に子孫の墓も営まれ、孔林と呼ばれる広大な墓域が形成されてゆく。孔林の南には、孔子と弟子たちが集った堂が廟となった孔子廟（孔廟）や、孔子直系の子孫の居所である孔府が築かれ、歴代王朝によって増築・修繕が繰り返された。

儒教美術は、「聖蹟図」と「聖賢図」に大別される。「聖蹟図」は孔子の生涯を画像で辿ったもので、仏教美術における「仏伝図」に当たる。「聖賢図」は、孔子や十哲などの弟子、古代の聖帝、後世の儒者の肖像画集で、仏教美術ではさしずめ「図像集」に相当する。孔子像は、この「聖蹟図」と「聖賢図」の相関性のなかで形成されてゆくが、なかでも釈奠に際し孔子廟に祀られる孔子像は重要である。残念ながら、曲阜孔子廟に祀られた孔子像や、長安・洛陽および全国の州県に建てられた孔子廟の孔子像で宋代（北宋・南宋）まで遡るものは一切現存しない。孔子の図像で現在確認しうる最初期のものは、「聖蹟図」の一場面ともいえる漢代画像石の「孔子・老子会見図」である。まずは２、３の漢代画像石「孔子・老子会見図」を検討したい。

「孔子・老子会見図」は、『史記』「孔子正家」・「老子韓非列伝」などに記載された、礼についての疑問を解くため30代半ばの孔子が弟子を連れて周の都・洛陽に出かけ老子に面会を求めた場面である。もと山東省嘉祥県の武氏祠（２世紀中頃）にあった画像石の拓本を見ると[15]、画像のほぼ真ん中にそれぞれ馬車を降りた老子と孔子が会見している。向かって右が老子で肩に「老子」と刻まれた榜題があり、左の孔子の肩には「孔子也」との榜題がみえる。両者とも側面観で表され、老子は冠を被り長袍を着て腰を曲げ竹杖を持ち、対する孔子も冠を被り長袍を着て頭を下げ挨拶をし、年長者への捧げ物である雉を持つ。両者の間の下部に童子、上部に飛鳥が表されている。下部の童子は画像が破損し判然としないが、他の同場面の画像石を参照すると、車輪のついた玩具を持った子供であると推定できる。老子の後ろには、御者の乗る馬車と榜題（字は不明瞭あるいは無字か）、さらに後方に老子の３人の弟子が立つ。孔子の背後には、『史記』「孔子正家」や『論語』が記す豎子（従者）と一乗車（御者は弟子の南宮敬叔か）と馬二頭が描かれ、「孔子車」の榜題を示す。

東京国立博物館蔵の山東省嘉祥県出土画像石「神仙・馬車・周公旦・狩猟」（１～２世紀）は、全体を上下４段に区画し、上から３段目「周公旦」の向かって左に「孔子・老子会見図」（図６）を表している。小画面で登場人物も４人だけであり孔子と老子の位置が逆であるが、両者の会見する様子は、上記武氏祠画像石とほぼ同じである。老子は冠を被り長袍を着て

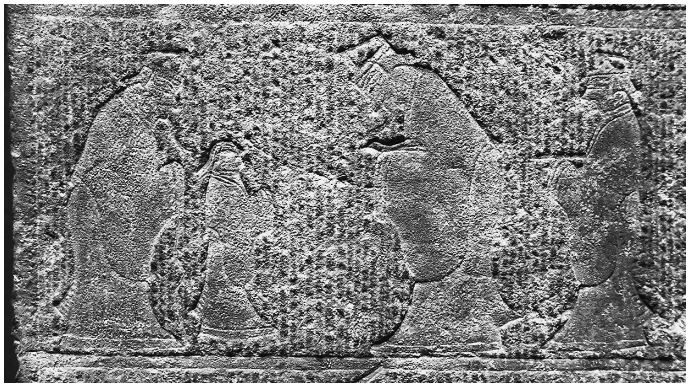

図６　東京国立博物館蔵漢代画像石「孔子・老子会見図」

腰を曲げ竹杖を持ち、対する孔子も冠を被り長袍を着て頭を下げ挨拶をし、年長者への捧げ物である雉を持つ。ただし、両者の間の子供は車輪のついた玩具は持たず、孔子の後ろには弟子が控えている。なお、孔子と老子の間の子供は、孔子の師でわずか７歳の項橐という見解もある[16]。

これら２つの画像石はいずれも山東省嘉祥県出土の後漢代（１～２世紀）のもので、山東画像石に「孔子・老子会見図」が頻出するのは山東省（春秋戦国時代の魯国）が孔子の故郷であることに言を俟たない。また、山東省に隣接する安徽省徐州市出土の画像石にも「孔子・老子会見図」は散見できる[17]。

山東画像石や徐州画像石の「孔子・老子会見図」は一様に図様を同じくし、後漢時代にはすでに一定の図像形式が出来上がっていたことを物語る。なかでも孔子像は横向きで老子に対しお辞儀をしており、老子よりもいくぶん背が高く表現される。これは、『史記』「孔子正家」の「孔子の身長は九尺六寸、人々はみな長人と言って珍しがった」という記述に由来するのだろう。当時の尺からすると、孔子は２メートルを超す大男とみなされていたらしい。孔子の顔貌表現について、画像石という特質上顎鬚の有無を判別できないものが多く、孔子の顎鬚を明確に表現した画像石はほとんど無いが、30代半ばで年長の老子と会見したとする孔子の姿を察すると、おそらく顎鬚を表さないのが定形であったのではないだろうか。顎髭は古来中国において英雄や聖者・賢人のシンボルであるが、こと「孔子・老子会見図」では老子の風貌との対比から孔子の顎鬚を省略した可能性も否定できない。だとすると、本龕の孔子像は漢代画像石から継承された、老子と会見する若年の孔子像をイメージしているのかもしれない。四川地方でも後漢代の新津崖墓の石函などに「孔子・老子会見図」が刻まれており[18]、漢代四川の「孔子・老子会見図」中の顎鬚のない孔子像が本龕の孔子像のイメージソースとする推測も成り立たないわけではなかろう。冒頭で述べた前漢・成都の「益州文翁学堂図」の例を鑑みると、四川も山東に並んで孔子図像の濫觴地といっても過言ではない。

上記の通り、各地の孔子廟に祀られた孔子像で宋代まで遡り得る現存作例は無いが、唐代以降の孔子像は大きく行教像、司寇像、衮冕像の３種類に分けられる。

行教像とは在野で弟子たちの教育にあたる孔子を表現したもので、巾という小さな布で髪の毛を束ね、簡素な儒服を姿である。馬場春吉『孔孟聖蹟図鑑』の45頁には、闕里の孔子像の線刻画として東晋の画家顧愷之（344頃～405頃）が描いたとされる模刻画（拓本）を載せる[19]。北宋・徽宗の政和６年（1116）銘のこの像は、顔子（顔回）の立像を従え、小さな頭巾を被り顎髭を蓄え寛衣を着て佩刀する立姿の孔子行教像である。また『孔孟聖蹟図鑑』の同頁には、唐の画家呉道子（道玄。８世紀前半に活躍）筆を原図とする線刻画（拓本）も載せるが、顔子像を省き頭巾の形に相違があるもののほぼ顧愷之原図線刻画と同様な行教像である。これには北宋・米芾（1051～1107）の賛が刻されている。これらの原図は、中国絵画史上の２大巨匠が描いたとされるだけに、後世の孔子行教像の規範になったのであろう。

司寇像は孔子が魯国の大司寇（司法大臣）であった時の姿で、頭に法官の冠をつけ、首には「方心円領」という天円地方の世界観を象徴するネックレス状の飾りをつける点が特徴である。『孔孟聖蹟図鑑』の45頁には、半身像として呉道子が画く所を模刻したという線刻画（拓本）を掲載しており、この呉道子原図孔子司寇像も後世の模範になったと思われ、曲阜市文物局蔵「孔子司寇像」（清代。孔府旧蔵）のような画像が制作されていったと考えられる[20]。

衮冕像は、衮服冕冠という皇帝の礼服を着た姿である。開元27年（739）に玄宗皇帝が孔子に「文宣王」号を追諡し、長安・洛陽・闕里の孔子廟に祀られる孔子像の服を衮冕として以降、各地に建てられた孔子廟の孔子彫塑像の服装として徐々に定着してゆく。先述の如く、現在曲阜孔廟大成殿に祀られている孔子塑像（原像は清代、文化大革命で破損後、1983年再塑）は衮冕姿で、高さ3.5メートルの倚坐像である。12旒の冕冠を被り、顎鬚を長く垂らし、12章（紋様）の衮服を着け、

手に鑑圭を執る。典型的な中国歴代皇帝の姿である。なお、南宋代の大足妙高山石窟第２号三教窟の孔子倚像も衰冕姿であるが、顎髭を表さない点は本龕の孔子像と共通する[21]。

⑵　石篆山第６号龕孔子像の図像解釈

本龕の孔子像（以下、本像）は、頭巾を被り簡素な儒服を着るという点で行教像といえる。しかし、顧愷之本や呉道子本に基づく立像ではなく、倚像で左右に十哲像を配する点は開元27年（739）以前の孔子廟に祀られた孔子行教像の旧様に拠ったのかもしれない。ただし、本像の壮年相と顎鬚を表さない点は、漢代画像石「孔子・老子会見図」の孔子像の姿を参考した可能性が否めない。実際、本龕は左隣の第７号三身仏龕を挟んで第８号老君龕と三教合一龕として造営されており、本像と第８号龕中尊老君像とは対応関係にあると考えられる。老君は太上老君といい、道教における最高神の一尊、老子を神格化したものである。この老君像は坐高80センチ、髪を蓮華状に結った上で冠を被り、老相を示し長い顎鬚をたくわえ、円襟で広袖の長袍（道服）を着て、陰几という三脚の肘掛け（脇息）を正面に据え、左手をその上に置き、右手で麈尾を執り、高い宣字座上に結跏趺坐している。ちなみに、この宣字座正面の刳り内に獅子像を彫り出すのは明らかに仏像の獅子座から影響されたものであろう。

老君（老子）の彫像は南北朝時代後期（６世紀）に仏像（特に維摩居士像）の影響を受けてその像容が定まり、例えば北周・天和３年（568）銘の杜氏老君像（東京藝術大学大学美術館蔵）などの作例を生む。第８号龕老君像も杜氏老君像とほぼ一致した像容で、典型的な老子像と言える。本像は、この老君像と対照的に漢代画像石「孔子・老子会見図」を踏まえた上で、壮年相の顎鬚がない顔貌で表現されたのであろう。上記の大足妙高山石窟第２号三教窟は窟内正壁に中尊釈迦如来坐像、左壁に老君倚像を彫出し、右壁は老君像と対峙するように孔子倚像を彫り出す。衰冕姿の孔子像が顎髭を表さない点は、石篆山石窟の本像と第８号龕老君像との対応関係と同じ理由からであろう。

ところで、本像と図像比較するうえで、看過できない作例がある。北宋の画家李公麟（1049～1106。号は龍眠）の原図によると伝承されている「聖賢図石刻」である。この「聖賢図石刻」は、金との徹底抗戦を主張した南宋の武将・岳飛が獄死し彼の自宅を廃して杭州大学を建て（1144年）、孔子を祀る大成殿を造る際に掲げられた石刻である。紹興26年（1156）、李公麟の原図による孔子と七十二弟子の肖像石刻として作られ、杭州大学に置かれ、その拓本が南宋諸郡の学校に頒布された。長い年月を経て、石刻は荒草の中に埋没したが、明の宣徳２年（1427）に呉訥という人物によって収拾・整理され（その際、秦檜の跋文を削除し自らの跋文を追記）、1957年11月に杭州府学の大成殿に安置され、現在に至っている。

図７　李公麟原図「聖賢図石刻」孔子像（拓本）

刻石は15石からなり（１石は逸亡し、現存は14石）、横長の画面に各３人から６人のグループに分けて孔子と72人の弟子たちの肖像が刻まれている[22]。南宋初代の皇帝高宗の序と賛、向かって右斜側から描かれた孔子坐像、立姿の顔回と続く。孔子像（図７）は、頭巾を被り、目尻に皺を刻み顎鬚を蓄えた老相で、広袖の長袍と領巾、裾にフリルが付いた裙を着て、右手は胸前で第１、第２指を結び、左手は腹前で如意を執り、四角い床几に坐る。四角い床几は孔子が門人たちに学問を教えた曲阜の「杏壇」を表しているものと思われる。この姿は南朝（５～６世紀）の南京西善橋官山墓出土の塼画

「竹林七賢・栄啓期図」の七賢人などに表された士大夫の服制と一致し、伝李公麟原図の孔子像が古くは南北朝時代に遡る古様の行教像を参考にした可能性も考えられる。この石刻の原図が白描画を得意としたという李公麟の確実な真筆であるかどうかは不明であり、同時期（北宋・李公麟活躍期）制作の本像とは顔貌表現や服装・坐勢が異なり、かならずしも直接的な影響関係は問えない。しかしながら、盛唐（８世紀）以降の神格化された衮冕像や、厳めしい司寇像とは一線を画す像容となっており、漢代画像石「孔子・老子会見図」を淵源とする可能性もあり神格化の度合いが薄い本像の趣向と共通するところもあろう。その意味では、本像と伝李公麟原図石刻の孔子像は各地の孔子廟の主尊として祀られ釈奠の際に礼拝される孔子像（画像にせよ彫塑像にせよ）とは相違し、実在の人間たる孔子のあり様を伝えているといえるのではないだろか。

大足石窟群の北宋代造像に見られる土着性や大衆化は、本像のような人間・孔子を表そうとするリアリズムが基盤となり、地元の民衆に分かり易く親しみやすいものとして受け入れられていったのであろう。いっぽう「聖賢図石刻」の孔子及び七十二弟子像を李公麟原図と記すのは呉訥の跋文によるだけで明代までに仮託された可能性も否めないが、李公麟筆を伝える「五馬図巻」（東京国立博物館蔵）に見られる卓越した線描で一世を風靡し、伝統的な白描画を復興し新たな禅宗白描画を創始した李公麟の写実性は、「聖賢図石刻」の肖像画にも看取できる。本像と「聖賢図石刻」の孔子像は、北宋の芸術思潮である復古主義的なリアリズムで通底していると言えるである。

⑶　石篆山第６号龕十哲像の図像解釈

『史記』「孔子正家」によると、孔子の門人は約三千人と推定され、そのうち六芸に通じたものは七十二人であったという。さらにその中で、特に『論語』では以下の十人を「孔門の十哲」と呼んで、４つの科（グループ）に分け「四科十哲」ともいう。

「徳行」に秀でた顔淵（顔回。以下カッコ内は本龕の刻記の名称）、閔子騫（閔損）、冉伯牛（冉耕）、仲弓（冉求？）。「言語」に秀でた宰我（宰我）、子貢（端木賜）。「政事」に秀でた冉有（冉有）、季路（仲由）。「文学」に秀でた子游（言偃）、子夏（卜商）。この四科の内容は、「徳行」＝仁徳を身につけて行動に表すこと。言語＝言語表現に巧みであること。政事＝政治家として能力のあること。文字＝詩・書・礼・楽に通じていること[23]。

上記の如く、本龕の十哲像は、首から下は朝笏の持ち方以外ほぼ同じ服制をしており、顔貌表現の差異によって各個性を表出している。そこで、『論語』などに載る十哲の性質をもとに、本龕の十哲像の顔貌表現と伝李公麟原図「聖賢図石刻」などの各像とを見比べ、各十哲像の礼拝位置（序列）を考えてみたい。なお、各十哲の性質は江連隆『論語と孔子の事典』（大修館書店。1996年）を参照とする。

本龕の孔子像の左隣の顔淵像は、本龕の刻記では顔回。前521～前490年。姓は顔、名は回、字は子淵、孔子と同郷の魯人で、孔子より30歳（一説では37歳）若く、29歳ですでに白髪であったといい、孔子よりも早く30歳（一説では40歳）で亡くなった。一を聞いて十を知る秀才であり、門人の中でもっとも学問好きであった。本龕の顔回像は、方形高冠を戴くため白髪であるかは不明であるが、明らかに孔子像よりは若く顎鬚を蓄えない青年相で表現され、顔を隣の孔子像に若干向けている。「聖賢図石刻」の顔回は、孔子と向かい合う立姿で表され、頭巾を被り面相もきわめて若い。顔回は孔門第一の弟子として格別に尊崇され、盛唐以降の釈奠では「先聖」孔子に対し「先師」とみなし、孔子廟ではほぼ孔子の傍らに祀られる。

ところで、日本の近世の作例ではあるが、「湯島聖堂釈奠図」（斯文会蔵）においても釈奠に際し孔子の左隣に先師顔回（顔子）が見える[24]。日本の釈奠に関しては、孔子画像を中心とする各十哲画像の礼拝位置（序列）は、鎌倉時代の藤原定家（1162～1241）の記した『釈奠次第』に詳細に記

され、弘安10年（1288）の「釈奠図」に示されたものが規範となっている。「湯島聖堂釈奠図」の礼拝位置もこれに倣ったものであり、その淵源は遣唐使・吉備真備が帰朝（735年）して整備した唐代の釈奠に由来すると考えられるため、本龕の顔回像の面貌表現や位置も唐代に定型化された釈奠の際の先師顔回像のそれに基づくものなのかもしれない。なお、この場合の序列は中国の通例に従い、左が右より上位で、孔子に近い方がより上位と考える。

本龕の孔子像の右隣の季路像は、本龕の刻記では仲由。前542～前480年。姓は仲、名は由、字は子路、または季路とも言った。魯の卞の人で、孔子より９歳若い。若い時に任侠を好み、性格は野鄙であるが、正道は曲げず、孔子のボディーガード的な役割を果たした。本龕の仲由像は、孔子との老若の差は微妙であるが顎鬚と髯（ほほひげ）を蓄えた壮年相（図８）として表され、顔を隣の孔子像に若干向けており、明らかに顔回像と対称的につくられている。「聖賢図石刻」の仲由は、現状顔回の後方７人目として、方冠を被り顎鬚・口髭と髯を蓄えた壮年相で、両肘を張って袖を翻し威勢を張って足を広げて立つ姿で描かれている。このような足を広げ両肘を張って袖を翻す侠気あふれる立姿は、漢代画像石の「孔子・老子会見図」にしばしば登場する子路像と一致し、ここでは「老子なにする者ぞ」という気概を表現したものであろう。同様な立姿の図像は、漢代画像石や墓室壁画の「二桃、三士を殺す」図の三壮士の一人にも見られ、漢代以降の一般的な勇士の形姿として定着していったものと考えられる[25]。本龕の仲由像は石窟造像という性質上両肘を張って袖を翻し威勢を張って足を広げて立つ姿ではないが、精悍な顔つきと顎鬚や髯の表現は「聖賢図石刻」の仲由像と共通し、漢代から継承された勇者子路のイメージを少なからず示したものと言えるだろう。なお、「湯島聖堂釈奠図」の仲由（季路）も先聖の右隣に祀られており、釈奠に際する（あるいは孔子廟に祀られる）孔子を中心とする顔回（顔淵）・仲由（季路）の三子の配置は定まっていたようである。

図８　石篆山第６号龕仲由面相部

本龕の顔回の左隣は閔子騫、本龕の刻記では閔損。前536～前487年。姓は閔、名は損、字は子騫。魯の人で、孔子より15歳若い。『論語』では、無口だが発言すれば必ず道理に当たると評している。本龕の閔損像は、方形高冠を戴き顎鬚を蓄えず若干顔回よりも年配そうな相好ではあるがあまり差はない。ほぼ正面を向いている。「聖賢図石刻」の閔損は、現状顔回の後方１人目として、方冠を被り顎鬚・口髭をはやし、明らかに顔回よりも年配であるが、孔子よりは若年である。「湯島聖堂釈奠図」の閔損（子）も顔回の左隣に位置する。

本龕の仲由像の右隣の冉伯牛像は、本龕の刻記では冉耕。前544年～？　姓は冉、名は耕、字は伯牛。魯の人で、孔子より７歳若い。魯の中都で宰（家老）を勤めたという。本龕の冉耕像は、閔損と同様に方形高冠を戴き顎鬚を蓄えずほぼ正面を向いている。「聖賢図石刻」の冉耕は、現状顔回の後方３人目として、方冠を被り顎鬚・口髭をはやし閔損よりは老相に表されている。「湯島聖堂釈奠図」の冉耕（伯子）は閔損の左隣に位置し、本龕とは配置が異なる点が問題となる。本龕では閔損像の左隣は冉有像である。

本龕の冉有像は、本龕の刻記でも冉有。前522～前489年？　姓は冉、名は求、または有、字は子有。魯の人で、孔子より29歳若く、穏和な人柄だったが、いっぽう多芸で政治家向きと言われ、李氏の宰（家老）になり協力したことが、後に孔子に非難された。本龕の冉有像は、方形高冠を戴き立派な顎鬚をはやし左手で鬚の先を掴んでいる。顔を左やや斜め上外側に向けている。「聖賢図石刻」の冉有（求）は、現状顔回の後方４人目として、顎鬚・口髭をはやし若干下を向き優し気な表

情であり、本龕の冉有の顔貌とは相違する。「湯島聖堂釈奠図」の冉有は孔子の左脇５人目に位置している。

本龕の冉耕像の右隣の宰我像は、本龕の刻記でも宰我。前522～前489、一説では前458年。姓は宰、名は予、字は子我。魯の人で、孔子より29歳若く、弁論に勝れていたというが、いっぽう日中に昼寝をして、孔子を嘆かせている。後に斉の臨淄の大夫となって内乱に加わり、一族が皆殺しにされたことを孔子は恥とした。本龕の宰我像は、方形高冠を戴き顎鬚は無く顔を右やや斜め上外側に向けており、冉有と対称的に表されている。両者とも孔子に非難された人物であるだけに孔子像に対してそっぽを向いているのであろうか。なかなか興味深い。「聖賢図石刻」の宰我（予）は、現状顔回の後方６人目として、顎鬚・口髭をはやし向かって左に歩む姿であるが顔は少し振り向いている。「湯島聖堂釈奠図」の宰我は季路のすぐ左隣に位置しており、この点も本龕の位置関係とは異なる。

本龕左側壁奥の子游像は、本龕の刻記では言偃。前506年～？　姓は言、名は偃、字は子游。呉の人、または衛の人という。熟慮して行動し、音楽によって教化して孔子を喜ばせたという。本龕の言偃は、眉間に皺を寄せて厳しめな表情をうかべ、右隣の冉有に顔を向けている。あるいは冉有に対して諭すような場面設定がされているのであろうか。「聖賢図石刻」の言偃は、現状顔回の後方５人目として、顎鬚をはやし後ろを振り向いている。「湯島聖堂釈奠図」の子游は、孔子の左側の４人目で本龕とは孔子に対して位置が左右逆である。

本龕右側壁奥の仲弓像は、本龕の刻記では「冉求」とされている。前522年～？　姓は冉、名は雍、字は仲弓。仲弓の名は雍なので、本来刻記では“冉雍”であるべきだが、何故か「冉求」となっている。この齟齬は本像を求の名もある「冉有」と誤認したことに起因するのかもしれない。前述した通り本龕の刻記は粗く、追刻の可能性も浮上する。したがって、本稿ではこの像に限って刻記の「冉求」ではなく仲弓像とする。仲弓は魯の人で、孔子よりも29歳若い。季氏の宰（家老）となり、孔子に君子にしても良い人物であると褒められている。本龕の仲弓像は、方形高冠を戴き立派な顎鬚をはやし左手で鬚の先を掴んでいる。この顔貌も本龕の冉有像とほぼ一致するため、刻記の混乱を招いたのかもしれない[26]。眉間に皺を寄せやや厳しい表情で、左隣の宰我に顔を向けている。この２人も何か言葉を交わしているように表わされており、本龕の言偃と冉有の場面設定と対称性を示している。「聖賢図石刻」の仲弓（冉雍）は、現状顔回の後方２人目として、右斜め背面から表され、顎鬚を蓄えた右横顔しか確認できない。「湯島聖堂釈奠図」の仲弓は、孔子の右側の４人目で本龕とは孔子に対して位置が左右逆である。

本龕左側壁手前の子貢像は、本龕の刻記では端木賜。前520？～456年？　姓は端木、名は賜、字は子貢。衛の人で、『論語』の中では孔子との問答がもっとも多い。聡明だが、雄弁家でもあり、孔子に聡明さをほめられ、多弁をたしなまれている。孔子の没後、３年の喪が明け他の門人たちは帰郷したが、子貢は孔子の塚の傍らに家を建ててさらに３年仕えたという。本龕の端木賜像は、顎鬚はなく眉間に皺を寄せまさに威儀を正しているかのような顔貌である。「聖賢図石刻」の子貢（端木賜）は、現状顔回の後方８人目として、顎鬚・口髭をはやし精悍な顔つきをしている。「湯島聖堂釈奠図」の子貢は、孔子の右側の３人目で本龕とは礼拝位置が異なる。

本龕左側壁手前の子夏像は、本龕の刻記では卜商。前507？～420年？　姓は卜、名は商、字は子夏。衛の人で、謹厳な人柄、孔子の死後は門人を教育し、後に魏の文侯の師になって政治顧問として活躍した。本龕の卜商像は、顎鬚を蓄え両手で朝笏を胸前で捧げて敬虔な相好である。「聖賢図石刻」の子夏（卜商）は、現状顔回の後方９人目として、顎鬚を少しはやし横向きに表され右前方へと歩むように描かれている。「湯島聖堂釈奠図」の子夏は、孔子の右側の５人目で本龕と礼拝位置が一致する。子夏（卜商）は、孔門十哲の掉尾を飾る存在として唐代以降定まっていたのかもし

れない。

以上のように、本龕の刻記による各十哲像の礼拝位置（序列）は、唐代の釈奠を淵源としたと考えられる「湯島聖堂釈奠図」の礼拝位置と異同が多い。10人中６人の祀位が異なる。ただし本龕の刻記は、仲弓像の例のように追刻の可能性があり、北宋・元佑３年（1088）造営時の十哲像の姓名と錯誤が生じた可能性も否めない。残念ながら、本龕の各十哲像の序列が唐代の釈奠にも基づくものか否かは、正確には判断できない。しかし、上述のように孔子を中心とする顔回（顔淵）・仲由（季路）の三子の配置や、子夏（卜商）が十哲の最後に序列されることは唐代より定型化していたようである。

おわりに

本龕の孔子像は、頭巾を被り簡素な儒服を着る行教像である。しかし、壮年相と顎鬚を表さない点は、顎鬚をたくわえ皺を刻み老相を示す伝李公麟原図「聖賢図石刻」の孔子行教像や、足利学校の孔子行教像とは一線を画す顔貌表現である。この相違は、本龕の孔子像が漢代画像石「孔子・老子会見図」中の30代半ばと考えられる孔子像のイメージを継承しつつ、三教合一龕として本龕と連関して造営された石篆山第８号老君龕の老相の老君（老子）像と対照的に壮年相で表されたことに起因すると推測される。

第８号老君龕の正壁中尊老君像の両側には各４尊、左右壁には各３尊、計14尊の侍者立像が彫り出されている[27]。これら侍者像は、いずれも像高130センチ前後で、髪を束ね小冠を戴き、円襟で広袖の道服を着て、両手で朝笏を握り、ほぼ同形同大の像であるが、顎鬚の有無や面相表現の差異で若干の個性を表出している。そのなかで老君像の左隣の像は顎鬚がなく、右隣の像は顎鬚と髯を蓄えており、本龕の顔回（顔淵）像や仲由（季路）像と面相が重なる。第８号老君龕は本龕より５年早く造営されているため、本龕の顔回像と仲由像は老君龕の両像の面相表現を踏まえて造像されたのかもしれない。そしてその対応関係は、本龕と老君龕の間に、老君龕の前年（1082）に造営された第７号三身仏龕にも指摘できよう。

三身仏龕は、龕高1.47メートル、窟内正壁の中尊に毘盧仏（毘盧遮那仏）坐像、左尊に盧舎那仏坐像、右尊に釈迦仏坐像を彫り出す[28]。正壁の３仏像の間には４軀の僧形立像、左右側壁には各３軀の僧形立像を彫り出し、十大弟子像を形成している[29]。なかでも中尊毘盧遮那仏の両脇侍像は、左脇侍が若相の僧形像、右脇侍が老相の僧形像で表現される。一般に中国の石窟造像や仏龕像・石碑像では、南北朝時代から一仏二比丘の三尊像および一仏二比丘二菩薩の五尊像において両比丘像を老若に造り分け、左の老僧を迦葉、右の若相を阿難とみなす見解が強い。三身仏龕は毘盧遮那仏の左脇侍が若相の僧形像、右脇侍が老相の僧形像になっており、通例とは左右逆である[30]。この三身仏龕に見られる通常とは逆の中尊の左脇に若相、右脇に老相という弟子の構成が、第８号老君龕の中尊老君像の左右の侍者に反映された可能性が考えられる。さらにその対応関係は、本龕の顔回像と仲由像に受け継がれていったのではないだろうか。もともと顔回（顔淵）は『論語』などによると、孔子よりも30歳（一説では37歳）若く、伝李公麟原図「聖賢図石刻」の顔回像の面相もきわめて若い。仲由（季路）は孔子より９歳若いが十哲の中では閔損（閔子騫）に次ぐ２番目に年長で、「聖賢図石刻」の仲由像は顎鬚・口髭と髯を蓄えたいくぶん老年気味の壮年相である。中尊を挟んで両脇の弟子という関係性においても、若年の阿難と顔回、老年の迦葉と仲由はイメージが重なる。前記した通り、第７号三身仏龕と第８号老君龕、本龕は地元・岳陽の鐫工（彫工）である文惟簡と息子たちが造営したものである。本龕の顔回と仲由の各造像に際し、文惟簡たちが数年前に造った三身仏龕正壁中尊の左脇侍若僧像と右脇侍老僧像や、老君龕老君像の左脇若相侍者像と右脇

老相侍者像を対応させた可能性は充分考えられる。もちろん、造像銘記に載る本龕の願主厳遜が彫工の文惟簡たちにこれら３龕の対応性を指示したとも推測できる。

ところで本龕の願主厳遜は「弟子厳遜」と刻記される。概して中国の石窟造像や仏龕像・石碑像で「弟子」と銘記された場合、それは「仏弟子」すなわち仏教信者を指す。本龕も仏教信者である厳遜が儒教の孔子像及び十哲像を造像させたと想定できる。題記により、本龕は元佑３年（1088）10月７日に完成され、水陸会が催されたことがわかる。水陸会は、水中と陸上の亡者・餓鬼に飲食物を散布する施餓鬼会と同じであるが、狭義では仏事を修して僧尼に食事を施し貧者救済など諸難救済や亡者供養を願う斎会を指し、唐末以降四川で大いに流行したことが大足石窟群に残る多くの造像銘記から理解できる。なかでも大足北山石窟においては、薬師仏、各種の観音菩薩、地蔵菩薩、十王などの造立・供養に際して「水陸斎会」、「斎会」、「修斎」の銘記が頻出する。特に地蔵像および十王像の造立に対する水陸斎会は、地獄に在って衆生を済度するという意味が濃い。石篆山石窟でも北宋・紹聖３年（1096）銘の第９号地蔵十王像龕が、第７号・８号双龕と本龕が穿たれた一連の崖壁に開鑿されている。この龕の地蔵十王像も文惟簡と息子たちの造立である。第９号龕には、現状において水陸会や修斎の銘記は確認できないが、おそらく地獄済度のための水陸斎会が催されたと思われる。第９号龕の正壁中尊地蔵菩薩坐像（坐高136センチ）の左右にいずれも同サイズの十王倚像が並ぶ様相は、脇侍の立坐の差はあるものの、本龕の孔子及び十哲像と近似性を感じる[31]。

以上、本龕の孔子及び十哲像は、第６号龕の三身仏像及び十大弟子像、第７号龕の老君像及び14侍者像と連関し、（仏）弟子・厳遜が発願、地元岳陽の鐫工文惟簡が造立、水陸斎会を行い諸難救済や亡者供養、地獄済度という、きわめて四川的ないしローカル（大足的）な願いを目的とした三教合一の造像といえるのである。本龕の孔子像が、後世の孔子廟に祀られた厳めしい衮冕像ではなく、十哲に講義するリアルで人間的な行教像なのは地元に根付いた造像の証であるのだろう。

註

（１）　胎内銘に関しては、大沢慶子「足利学校孔子坐像考」（『学校』第２号、史跡足利学校「研究」紀要。2002年３月）に詳しく解読されている。

（２）　註（１）文献参照。

（３）　註（１）文献253頁。

（４）　守屋正彦「儀礼空間の表象―日本の孔子像の変遷について―礼拝空間―超越者と対峙する場の創造（第69回美術史学会全国大会当番機関企画シンポジウム）」（『藝叢』〈筑波大学芸術学研究誌〉第32号。2016年）参照。

（５）　前漢初期の曲阜孔子廟に祀られた孔子像については、木主（位牌）の可能性もある。

（６）　杉原たく哉「聖賢図の系譜―背を向けた肖像をめぐって―」（『美術史研究』36冊。1998年）参照。

（７）　翠川文子「釈奠（二）―孔子像―」（『川村短期大学研究紀要』第11号、1991年３月）、および註４文献参照。この孔子廟改修の記事は、『魏書』列伝第二十四・李仲琁伝に記載されている。

（８）　『唐書』巻15礼楽志第５。中野昌代「唐代の釈奠について」（『史窓』第58号。2001年２月）参照。

（９）　註（７）の翠川文献参照。

(10)　『明会典』嘉靖九年条。

(11)　第４号龕は龕内に冠を戴いた男性立像が１軀彫出されている。『大足石刻研究』（四川省社会科学院出版社。1985年）ではこの像の尊名は不詳とするが、『大足石刻雕塑全集　４　南山・石門山・石篆山等石窟巻』（重慶出版社。1999年）では薬王像とする。

(12)　第２号宝誌和尚龕については、拙稿「神異なる仮面の高僧―四川省石窟宝誌和尚像報告」（『象徴図像研究―動物と象徴』言叢社。2006年）参照。

(13)　註（12）の拙稿参照。

(14)　本稿に記す窟龕及び造像の法量は、おおむね註（11）の『大足石刻研究』を典拠とする。
(15)　馬場春吉『孔孟聖蹟図鑑』（山東文化研究会。1940年）の87頁に、この拓本を掲載しやや詳しい解説を記す。
(16)　東京国立博物館東洋館のキャプションの解説参照。
(17)　杉原たく哉『漢代徐州画像石の世界』（まゆ企画。2001年）の画像㉗参照。
(18)　高文編『四川漢代画像石』（巴蜀書社出版。1987年）の77頁・図２参照。
(19)　註（15）文献および註（７）の翠川文献参照。
(20)　杉原たく哉氏は、この曲阜市文物局蔵「孔子司寇像」の顔貌と十王図中の閻魔（閻羅）王との顔貌の類似性を指摘し、その図像の還流現象を論じた卓見を提示している。杉原たく哉「顔と姿の図像学―３．孔子」『中華図像遊覧』（大修館書店。2000年）参照。
(21)　註（11）の『大足石刻雕塑全集　４　南山・石門山・石篆山等石窟巻』の図160を参照。
(22)　この石刻の拓本は、黄涌泉『李公麟聖賢図石刻』（人民美術出版社。1963年）および註（15）文献に載る。
(23)　四科の内容は、江連隆『論語と孔子の事典』（大修館書店。1996年）から引用した。
(24)　横島菜穂子「《湯島聖堂釈奠図》について」（『草創期の湯島聖堂』財団法人斯文会。2007年）参照。
(25)　土居淑子『古代中国の画象石』（同朋舎出版。1986年）25頁参照および註（17）文献参照。
(26)　註（11）の『大足石刻雕塑全集　４　南山・石門山・石篆山等石窟巻』では、「冉求」と刻記があるこの像の図版（番号100）を「冉有」像としている。
(27)　これら14の侍者像は、左壁上方に“大法”、右壁上方に“真人”と刻記されているが、この刻記は追刻の可能性が高いため、本稿では単に侍者像とする。
(28)　第７龕の正壁三身仏像の各尊名は、註11の『大足石刻研究』に拠った。なお、『大足石刻雕塑全集　４　南山・石門山・石篆山等石窟巻』では中尊を毘盧仏、左尊を釈迦仏、右尊を弥勒仏として、龕名も三尊龕とする。
(29)　第７号三身仏龕の他の造像は、左尊盧舎那仏の左隣に菩薩立像、右尊に釈迦仏の右隣に菩薩立像、龕内左隅に男性供養者像、右隅に女性供養者像を彫り出している。
(30)　註（11）の『大足石刻研究』や『大足石刻雕塑全集　４　南山・石門山・石篆山等石窟巻』では、左若僧像を阿難、右老僧像を迦葉としている。
(31)　第９号龕は、地蔵像の左右に比丘像と侍女像、十王像の背後に侍者像や司官像が立ち並んでいる。

［図版出展］

図１～図５、図８　井上芳明氏撮影。
図６　執筆者撮影。
図７　黄涌泉『李公麟聖賢図石刻』（人民美術出版社。1963年）２頁。